

■学校経営のポイント

成長には「鏡」が必要

喜名 朝博

授業のない夏休み、この約1ヵ月で子どもたちは心身共に大きく成長する。

その成長を促すのは、さまざまな体験や他者との関わりを通した、自分自身を見つめる時間が増えることにあると考えられる。

子どもたちの自己理解力の低下

イライラしている感情の理由を言語化できない、自分の言動が他者に与える影響を考えられない等、自己を客観視できない子どもたちが増えている。できていないのに「できている」と思い込む、逆に十分にできているのに自信をもてないといった認知の歪みも顕著である。

これらに共通する背景として、自己理解力やメタ認知の弱まりが指摘できる。その一因として、子どもたちが自らの内面を見つめ、省察する時間の減少があるのではないだろうか。

内面を見つめる時間を奪っているもの

文部科学省の調査によれば、小中学生の相当数が1日3～4時間以上をスマートフォンやゲームに費やしている。

こうしたデジタル機器への長時間接触は、経験を断片化し、思考や感情を整理する時間を奪う。また、「失敗するとできない自分が露呈してしまう」ことを避けようとする安全志向や、大人が先回りして答えを与えてしまう行為も、子どもが自ら考え、経験を振り返る機会を阻害してしまう。

自己理解とはプロセスである

われわれは、子どもたちに対し「正しい自己理解ができていない」と考えがちだ。しかし、そもそも正しい自己理解など存在しない。成長期の子どもたちのアイデンティティは常に揺れ動き、変化し続けている

のだ。自己理解とは、固定的な「正しい答え」を獲得することではなく、状況に応じて揺れ動く自分を継続的に認識するプロセスである。

子どもたちは、家庭、学校、仲間など関係性の違いによって態度や言葉遣いを変える。しかし、それらはすべて「本当の自分」であり、単一の自己像に収斂されるものではない。さらに、「自分はこういう人間である」とラベリングさせてしまうことは、その後の成長や可能性を縛るリスクがあることに留意しなければならない。

自己理解には他者という「鏡」が必要

心理学者クーリーは、「自分はこう見られているだろう」という想像が、自己イメージを形成すると説明する(鏡映的自己)。他者のまなざしを「鏡」とすることで自己理解が深まっていくのだ。

しかし、SNSに代表されるように摩擦の少ない同質的関係性や、加工されたデジタル情報が、これらの「鏡」を歪めている。リアルな対話で得られる非言語情報が失われることで、自己理解の精度はさらに低下していくことになる。

省察する場面と時間をつくる

他者との関わりが生まれにくい時代だからこそ、学校は意図的に「鏡」をつくる必要がある。異なる意見をぶつけ合いながら合意形成を図る協働的な学び、感情を言葉に置き換えて対話する場、異年齢集団などで役割を切り替える経験は、子どもたちが安心して試行錯誤し、省察する機会となる。

この夏休み、子どもたちはどんな体験をし、どんな人と関わっているのだろうか。休み明けに共有したいのは、「何をしたか」だけではない。その体験を通して、「どんな自分に気づいたのか」である。

(きな・ともひろ＝国士舘大学客員教授／元全国連合小学校長会長)

大人も子どもも自分らしくいられる学校をめざして

対話する職員室

玉置哲也【著】 四六判／定価 2,530 円

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

